三冊の「おなかのかわ」に関する考察
―「こどものとも」をめぐって―

浜　崎　由　紀　（発達教育学研究科児童学専攻研修者）
棚　橋　美　代　子　（児童学科教授）

1　はじめに

「こどものとも」は直接販売を中心として1956年に創刊され，現在も発行されている福音館書店の月刊物語絵本である。「各月一冊一話」でなるペーパーバックで，数多くの物語絵本を生み出してきた。初期の「こどものとも」の編集は，松居直が関わった。月刊絵本として「一冊一話」の形式を取ったのは，当時としてははじめてであった。

先行研究では，「こどものとも」を様々な角度から分析した『日本における子ども絵本成立史―「こどものとも」がはたした役割』（三宅興子編著　ミネルヴァ書房　1997. 3）がある。この研究では，1989年度の400号までを取り上げ，四期（第一期：読者を育てる啓蒙期・創刊～1961年度・1号～72号，第二期：飛躍的発展の時期・1962年度～1967年度・73号～144号，第三期：物語絵本の充実期・1968年度～1977年度・145号～264号，第四期：物語絵本の安定期・1978年度～1989年度・265号～400号）に分けて分析しており，この区分は妥当だと思われる。

一度発行された「こどものとも」が，改訂版あるいは新版として，「こどものとも」や普及版（のちの年中版）として再度，刊行されたり，傑作集として版を改めて発行する作品もある。

本研究では，第一期の月刊絵本「こどものとも」の「おなかのかわ」（「1958年版おなかのかわ(A)」とする）と普及版「こどものとも」の「おなかのかわ」（「1975年版おなかのかわ(B)」とする），「こどものとも傑作集」の『おなかのかわ』（『1977年版おなかのかわ(C)』とする）の三冊を取り上げる。第一期の作品が，どのように変化したのか明らかにすることにより，編集者松居の絵本観の変化をみることができると考えるからである。

三冊の「おなかのかわ」を取り上げたのは，以下の理由からである。松居が，絵本制作に多大な影響を受けたのは瀬田貞二だったとのべている。「1958年版おなかのかわ(A)」は鈴木三重吉の訳であるが，「1975年版おなかのかわ(B)」，『1977年版おなかのかわ(C)』は，瀬田貞二の再話に変更している。そのため，瀬田が関っている作品を選んだ。

2　「おなかのかわ」制作の背景

「おなかのかわ」の話は，けちんぼでくいしんぼうのねこが，友達のおうむの家に招かれ，クッキーをはじめ，ごちそうをいっぱい食べる。それでも足りないからと招いてくれたおうむまで食べ，おばあさんを食べ，ろばとうまかたを食べ，おうさまとおうひさまと兵隊を食べ，という具合に食べていく。最後に出会ったかにも食べ，かにがねこのおなかのなかからはさみで開けて，そのあなから食べられた人や動物たちが登場し，最後には，ねこが自分のおなかを自分で縫うという繰り返しのあるナンセンス絵本である。

「おなかのかわ」はもともと，鈴木三重吉が主宰した大正期に創刊された雑誌「赤い鳥」（1936. 9，第9巻第3号）p. 6－p. 11に「おなかの皮」というタイトルで掲載された童話である。1958年に松居が「母の友」[1]（福音館書店 1958. 7，第58号）誌上に「リバイバル」で掲載し[2]，「1958年版おなかのかわ(A)」のテキスト

に使用している。

松居は，「1958年版おなかのかわ(A)」出版当初，この話が翻訳だとは思っていたが，原話が不明であった[3]。そのため，鈴木三重吉の訳をそのまま使用したとしている。松居は，1958年６月号「母の友」誌上で一頁をすべて鈴木三重吉の紹介に充てている。松居は，「赤い鳥」編集者であった鈴木の編集手法と幼年童話についての考え方，評価について興味を持っていた[4]。「作品選択や再話方法の確かさ」，「幼児童話も多くは海外の作品にヒントをえたもののようですが，日本の幼児童話の骨格を作る上には大切な要素をシッカリ含んでいます。」と述べている。そういう意味で，三重吉訳に異論はなかったと思われる。

「1975年版こどものとも(B)」を出版する際，鈴木三重吉訳の「おなかのかわ」は，アメリカの初期のストーリー・テリングの本に文例として載っていたアメリカ人の Sara Cone Bryant のものが原文だと判明する。当時，「おなかのかわ」は，三重吉の創作だと思われていたが，実は，北欧系の「食いしんぼうねこ」という系統の昔話の一つであった[5]。瀬田は，この原文を元に再話した。

「1958年版おなかのかわ(A)」，「1975年版おなかのかわ(B)」，『1977年版おなかのかわ(C)』の絵を描いたのは，村山知義（1901年－1977年）である。村山は，1920年代にヨーロッパからいち早く前衛美術や舞踊を日本へもたらした芸術家で，舞台演出の他，翻訳，創作などその活動は多岐にわたっている。戦前は，「子供之友」や「コドモノクニ」で童画家としても活躍していた。松居は，子どもの頃から村山を「tom さん」という名前で慣れ親しんでいた[6]。松居は，子どもにとって絵本の絵は，どれだけ影響を与えるものかを体験として実感しており[7]，信頼できる村山に「おなかのかわ」の絵を依頼したという経緯がある。

3　三冊の「おなかのかわ」に見られる相違点

(1)　形式面における違い

「1958年版おなかのかわ(A)」，「1975年版おなかのかわ(B)」，『1977年版おなかのかわ(C)』に見られる変化とその相違点を（表１）にまとめた。その中から，編集者である松居の絵本観と関わるであろう項目にそって述べる。

①　綴じと文字方向

「1958年版おなかのかわ(A)」では，本の綴じが右綴じ・右開きであるが，「1975年版おなかのかわ(B)」，『1977年版おなかのかわ(C)』では，左綴じ・左開きである。

松居は，1961年に，それまで絵本がほとんど縦版で本文は縦書きであったところを横版のサイズに変更し，本文もそれまでの常識を破って横書きを採用した[8]。その背景には，松居が，海外絵本の「翻訳出版により，絵本のつくり方について多くのことを学び」，「横書きの利点，あるいは横判で絵を描く時のダイナミックなおもしろさ，動きが非常によくでるといったようなこと，そういうことを体験」したことがある[9]。1961年を境に，絵本の左綴じ・左開き，横書きが定着していく。横書きになることによって読者は文字を左から右へと読み，絵も左から右へと読む[10]。

一頁一頁をめくっていくことで文字も絵も左から右へ読み，画面と次の画面につながり，別の画面ともつながっていき，連続性を生み出すのである[11]。

「1975年版おなかのかわ(B)」，『1977年版おなかのかわ(C)』の左綴じ・左開き横書きは，「こどものとも」の充実期，安定期にあたる。

②　本の形態

本の形態は，「1958年版おなかのかわ(A)」，「1975年版おなかのかわ(B)」は，ペーパーバック版であるが，『1977年版おなかのかわ(C)』は，ハードカバー版である。「1958年版おなかのかわ(A)」，「1975年版おなかのかわ(B)」は，表紙の裏すぐから本文が始まり，最後の頁もすぐに裏表紙になっている。真ん中をホチキスでとめている。『1977年版おなかのかわ(C)』は糸綴じである。ペーパーバックから，ハードカバーにすることにより，丈夫な体裁になり，何度読み返しても堅牢さを保つことができる。ハードカバーにした意図は，松居の次の言葉からうかが

（表１）

		「1958年版おなかのかわ(A)」	「1975年版おなかのかわ(B)」	『1977年版おなかのかわ(C)』
発行年		1958年	1975年	1977年
綴　じ		右綴じ・右開き	左綴じ・左開き	左綴じ・左開き
形　式		縦書き	横書き	横書き
形　態		ペーパーバック	ペーパーバック	ハードカバー
作　者	文	鈴木三重吉	瀬田貞二	瀬田貞二
	画	村山知義	村山知義	村山知義
表　紙	題　字	こどものともが大きく書かれ，絵本のタイトルは小さく書かれている	おなかのかわ	おなかのかわ
	キャッチフレーズ	心のかてを与える「母の友」絵本32		
	その他	左下部　⑪の数字	下部に月刊予約絵本「こどものとも」普及版⑥	下部に《こどものとも》傑作集
サイズ（縦×横）cm		25.7×18.1	25.9×19.2	26.6×19.4（内寸26×19）
頁　数		20（表裏表紙含む）	27（表裏表紙含む）	27（見返し・扉・後ろ見返し含まない　表記通り）
全体の文字数（句読点を含む）		3216文字	2440文字	2440文字
一頁当たりの平均文字数		179文字	94文字	94文字
裏表紙		（コラム）「父親の愛情」・奥付	奥付	読んであげるなら３才～自分で読むなら小学校初級向き
価　格		40円	120円	380円

うことができる。

> 絵本はいったい何度ぐらい読み返されるでしょう。何十回，ときには何百回です。それも一，二年はおろか四，五年間にわたって読まれるものです。上の子から下の子へと受け継がれます[12]。

絵本は，週刊誌のように１回読んだら読み返さないようなものではなく，何回も読み返され，読み継がれるものである[13]ことを前提にして，絵本制作を考えていたことがわかる。

『1977年版おなかのかわ(C)』は，ハードカバーになることにより，背表紙，見返し，扉，後ろ見返しが付けられている。背表紙は，絵本の題字，《こどものとも》傑作集18が書かれ，福音館書店の社章が描かれている。

表紙が物語の入り口を表すのと同様に絵本の一部としての役割を示す。扉は，劇場で「幕があくのと同じ効果が果たされる」[14]。つまり，読者がこれから物語が始まるという準備ができ，物語の世界に入りやすくなるのである。

後ろ見返しでは，扉と同じ絵が描かれ，物語の世界を演出している。また，後ろ見返しの頁に奥付がついたことで，「1958年版おなかのかわ(A)」，「1975年版おなかのかわ(B)」に見られた奥付の表示を移動することによって，裏表紙の絵を広げることができ，絵本の物語とは関係ない文字で絵を妨げることがなくなるのである。つまり，『1977年版おなかのかわ(C)』は，絵本一冊全体が物語の世界を構成しているといえる。

③　表紙の題字

表紙の題字は，「1958年版おなかのかわ(A)」は，「こどものとも」が大きく書かれ，絵本のタイトルは小さく書かれている。キャッチフレーズに「心のかてを与える『母の友』絵本32」とある。これは，「母の友」の付録という意味を示している。「こどものとも」創刊の動機が，「『母の友』の売り上げを伸ばすための付録として出版された」[15]ことによるものだと思われる。

「1975年版おなかのかわ(B)」,『1977年版おなかのかわ(C)』では，題字の「おなかのかわ」が大きく書かれている。「こどものとも」は，73号から「母の友」の付録ではなく，月刊絵本「こどものとも」として，独立した位置づけで出版されている。題字を大きく書くことにより，付録の絵本ではなく，一冊の物語絵本として確立したことを示しているといえる。

④　頁数

頁数は，「1958年版おなかのかわ(A)」は20頁，「1975年版おなかのかわ(B)」は27頁，『1977年版おなかのかわ(C)』は見返し，扉，後ろ見返しを含まず，表記通りであれば，27頁である。頁数が増えるため，必然的に絵（挿し絵）が増えている。これには，次のような経緯がある。

> 物語の絵本，ことに創作の絵本というのを，わずか二十頁，九場面で絵本にしようというのは土台無理だということもだんだんわかってまいりました。そのために，どうしても舌足らずの絵本になってしまう。絵と物語の関係がもう一つすっきりとゆかない。何となく，いつも欲求不満な形でおわってしまう[16]。

松居は，「こどものとも」を制作していく中で，16あるいは20頁と限られた頁数では，物語絵本の限界を感じていくようになるのである。

「絵と物語の関係がもう一つすっきりとゆかない」のは，絵と文字数の関係が考えられる。

テキストの文字数は，「1958年版おなかのかわ(A)」は，3216文字で一頁当たりの文字数は，179文字である。「1975年版おなかのかわ(B)」,『1977年版おなかのかわ(C)』は，2440文字で一頁当たり94文字である。「1958年版おなかのかわ(A)」は，頁数が少ない割に，文字数が多いということは，一頁に留まる時間が長く，絵による物語の流れが見えにくい。また，一頁当たりの文字数が多いと，絵に占める文字の部分が物語る絵を邪魔してしまうことになるのではないだろうか。文字も一つのイラストと捉えると[17]，レイアウトの面においても，問題があるといえる。「1975年版おなかのかわ(B)」,『1977年版おなかのかわ(C)』に改訂されることによって，文字数が減り，頁数が増え，絵に対する文の構成の均整がとれているといえる。

⑵　内容面における違い

「1958年版おなかのかわ(A)」の訳者は，鈴木三重吉，「1975年版おなかのかわ(B)」,『1977年版おなかのかわ(C)』の再話者は，瀬田貞二である。

絵の作者は，三冊共，村山知義である。しかし，「1958年版おなかのかわ(A)」から「1975年版おなかのかわ(B)」に改訂されるとき，描きなおしが行われている。また，『1977年版おなかのかわ(C)』では，絵本の形態に必要な見返し，扉，後ろ見返しが付加されている。

文と絵とそれぞれの変化を分析するために，ページごとに文を書き出し，場面ごとに絵の説明を記したものが，（表２）である。

まず，文からみていく。

①文のスタイル

（「1958年版おなかのかわ(A)」）

あるところに，ねこと　おうむが　おりました。ふたりは，あるとき　そうだんをして，これからおたがいに，かわるがわる　ごちそうをして，まいにち，よびっこをすることに　きめました。きょうは，ねこが　おうむの　ところへ　よばれていき，　あすは，おうむが　ねこに　よばれるというふうに，かわるがわる，よんだり，よばれたり　しようと　いうのです。　それで　まず，だい一ばんに，ねこのほうから　ごちそうを　することに　なりました。

（「1975年版おなかのかわ(B)」,『1977年版おなかのかわ(C)』）

あるところに，ねこと　おうむが　おりました。ふたりは　そうだんして　かわるがわる　ごちそうに　よぼうと　はなしあいました。

きょう，ねこが　おうむを　ごちそうに　よんだら，あしたは　おうむが　ねこを　よぶというのです。

上記の一重下線と二重下線とは，上下の引用

文でそれぞれ内容が呼応しているが，「1958年版おなかのかわ(A)」は，一文の文字数が多く，説明的な文章になっている。「1975年版おなかのかわ(B)」，『1977年版おなかのかわ(C)』の瀬田の文は，簡潔な文である。これは，昔話の手法であり，子ども，特に幼児にとって理解しやすい文である[18]。

② 絵と文の融合性

「1958年版おなかのかわ(A)」の八場面（写真Ａ－１）と「1975年版おなかのかわ(B)」，『1977年版おなかのかわ(C)』（写真Ｂ・Ｃ－１）の第十一場面についてみてみる。

この場面は，ねこに食べられた二匹のかにが，ねこのおなかから外に出るためにはさみで，ねこのおなかを切りひらいているところである。文は次のようになっている。

（写真Ａ－１）

（写真Ｂ・Ｃ－１）

「1958年版おなかのかわ(A)」
すぼめて　とまっておりました。「おい，はやくあなを　あけようよ。」とひとりの　かにに　いいました。「さあ，あけよう，あけよう。」と，ふたりは，さっそく，するどいつめを　ふりかざして，がりがり　がりがりと，ねこの　おなかの　かわを　ひっかきはじめました。まもなく，ふたりが，でられるほどの　あなが　あきました。「もっと　もっと。―ほかの　ひとも，だしてやらなきゃ　かわいそうだ。」とふたりは，なお，がりがり　がりがり　ひっかいて，とうとう　おおきな　あなを　あけました。

（「1975年版おなかのかわ(B)」，『1977年版おなかのかわ(C)』）
「それじゃ　うでを　ふるおうか」と　にひきの　かにがいいました。 そして　とがった　はさみで　おなかに　じょき　じょき　ちいさな　あなを　あけました。 じょき　じょき　じょき……あなが　だんだん　おおきくなりました。そして　ごそごそごそ　かには　おもてへ　はいだしました。

「1958年版おなかのかわ(A)」の場面は，おなかのなかをあらわす黒を背景にかに，おうむ，クッキー，ろばが描かれ，おなかの外の世界と思われる上部の白い背景に向かって，一匹のかにが，片方のはさみの先を上にして，あなをあけている様子を描いている。文では表しきれない，ねこのおなかの中を視覚的に描き，絵でおなかの中を物語っている。「1975年版おなかのかわ(B)」，『1977年版おなかのかわ(C)』の十三場面は，おなかのなかを黒の背景にし，あなを水色に描いて二匹のかにが，おなかを切っているシーンが描かれている。「1975年版おなかのかわ(B)」，『1977年版おなかのかわ(C)』は，より具体的にわかりやすく文と呼応して，ねこのおなかの中を表現している。文でもお話を語り，絵でもお話を語っている。これは，文学と絵画の総合芸術[19]という絵本の形態に当てはまる例である。

③ 連続性

「1958年版おなかのかわ(A)」の一場面（写真Ａ－２），二場面（写真Ａ－３）と「1975年版おなかのかわ(B)」，『1977年版おなかのかわ(C)』は，二場面（写真Ｂ・Ｃ－２）と三場面（写真Ｂ・Ｃ－３）は，同じ場面にあたるところである。「1958年版おなかのかわ(A)」と「1975年版おなかのかわ(B)」，『1977年版おなかのかわ(C)』は，本の開き方が反対になるにも関わらず，ねことおうむの位置の変更がない。「1975年版おなかのかわ(B)」，『1977年版おなかのかわ(C)』の二場面は，おうむがねこの家に行き，三場面はねこがおうむの家に行くのであれば，左右逆にねことおうむが配置されたほうが理にかなう。この点，作者の意図は明らかではない。

「1958年版おなかのかわ(A)」の三場面，四場面「1975年版おなかのかわ(B)」，『1977年版おなかのかわ(C)』の五場面，六場面では，頁をめくる方向に進行し，連続性がある。しかし，「1975年版おなかのかわ(B)」，『1977年版おなかのかわ

（写真Ａ－２）

（写真Ａ－３）

（写真Ｂ・Ｃ－２）

（写真Ｂ・Ｃ－３）

(C)』の七場面（写真Ｂ・Ｃ－４）になると，主人公であるはずのねこが進行方向とは違う方を向いており，はじめて登場してくる「おうさま」，「おうひさま」，「へいたい」の列が，進行方向を向いている。

（写真Ｂ・Ｃ－４）
絵本の進行方向 ⟶

九場面で，ねこは進行方向に向きが戻るが，十二場面，十三場面では，これでお話が終わることを暗示するように進行方向と反対側を向いて，右下の位置にねこが描かれている。

連続性が考えられて描かれているものと，そうでないものがあった。基本的に，連続性が認められるが，第三期充実期，第四期安定期にあたる時期に「1975年版おなかのかわ(B)」，『1977年版おなかのかわ(C)』は制作されているが，詳細な検討に関しては，今後の課題にしたい。

村山は，「1958年版おなかのかわ(A)」から絵を描きなおし，場面が９場面から13場面へ増えることによって，場面を追加して描いている。

「絵が物語る」ように描かれており，「1975年版おなかのかわ(B)」，『1977年版おなかのかわ(C)』の場面をすべて並べて絵をみると，そのお話の展開が大筋理解出来るような構成になっている。

４　おわりに

「1958年版おなかのかわ(A)」が発行された時期は，松居が「子どもの本とはなにか」を追求していた模索の時期である。「1975年版おなかのかわ(B)」，『1977年版おなかのかわ(C)』における変更を明かにすることにより，松居直の絵本観の一端をみることができた[20]。

松居直が絵本について学んでいく過程で，「1958年版おなかのかわ(A)」から「1975年版おなかのかわ(B)」への変更では，以下のことを取り入れていった。

①一つの画面から次の場面につながる連続性を重視していった
②絵本は文も物語り，絵も物語り，双方が融合して一つの世界をつくり，子どもにわかりやすく，書かれたものであること
③絵本は１回きりではなく繰り返し読まれることが前提に制作されること

そして，「1975年版おなかのかわ(B)」から『1977年版おなかのかわ(C)』へは，絵本としての完成度が高まり，安定した絵本となってきている。これらの変化は，松居の絵本に対する考えが深まり，充実していったことと重なるのである。

今回は，作品「おなかのかわ」にとどまったが，今後の課題として，他の作品も分析し，研究を積み上げて松居直の絵本観について検証していきたい。

注

1）「母の友」は，1953年に創刊された福音館書店の月刊雑誌で，「子どもに聞かせる一日一話」を中心に据え，心理学と家庭教育，しつけと実用的な記事を載せた内容になっていた。

2）松居直『松居直自伝』ミネルヴァ書房，2012. 1，p. 161 「おなかの皮」は，雑誌「赤い鳥」（1936年９月１日発行第９巻第３号）に掲載された。松居は，「母の友」に掲載する際，旧漢字，旧仮名づかいから，現代仮名づかいに変更している。漢字は，漢数字以外はすべて平仮名にしている。さらに，松居は，「おなかのかわ」の文を鈴木三重吉作としながら，一部，読点の省略，かぎ括弧の省略，単語の書き換えをしている。例えば，お菓子の数が「四百九十八」から「五ひゃく」，「お嫁さま」から「おうひさま」，「隅」から「すみっこ」などである。

「母の友」掲載の「おなかのかわ」から「1958年版おなかのかわ(A)」のテキストの変更も大幅に行われている。「だい一ばんに」，「ひとりで」，「みんな」，「すっかり」，「まるのみに」などの語句や，文章の省略もみられる。童話から童話，童話から絵本を制作する過程にみられるこれらの変更は，松居の童話観・絵本観と関わるものであるといえる。稿を別にして論じる必要があり，今後の課題としたい。

3）その後，出典がわかり，「おなかのかわ」の復刻版では，奥付に Original Text by Sara Cone Bryant とある。「1975年版おなかのかわ(B)」，『1977年版おなかのかわ(C)』の奥付には原題が「Cat and Parrot」とある。

4）松居直『絵本のよろこび』日本放送出版協会，2003. 11，p. 188

5）瀬田貞二『幼い子の文学』中公新書，1980. 1，p. 25

6）前掲４，p. 189

7）前掲４，p. 144－147

8）前掲４，p. 196

9）松居直『絵本とは何か』日本エディタースクール出版部，1973. 12，p. 255

10）藤本朝巳『絵本のしくみを考える』日本エディタースクール出版部，2007. 10，p. 60

11）前掲９，p. 254

12）前掲９，p. 127－128

13）前掲９，p. 128

14）前掲９，p. 140

15）『日本における子ども絵本成立史―「こどものとも」がはたした役割』ミネルヴァ書房，1997. 3，p. 129

16）前掲９，p. 257－258

17）瀬田貞二『絵本論―瀬田貞二　子どもの本評論集』福音館書店，1985. 11，p. 154

18）石井桃子　いぬいとみこ　鈴木晋一　瀬田貞二　松居直　渡辺茂男『子どもと文学』福音館書店，1967. 5，p. 179

19）前掲９，p. 149

20）「こどものとも」は，物語絵本であるため，本来は絵本として分類し，三冊すべて『　』（二重かぎ括弧）に標記にするのがよい。しかし，「1958年版おなかのかわ(A)」，「1975年版おなかのかわ(B)」は，ペーパーバックの絵本であるため，本稿では，便宜上，「　」（一重かぎ括弧）を使用した。

松居は，松居が子どもの頃から親しみ，「特異なスタイルの童画家」であった村山に絵を依頼している。そして，「1975年版おなかのかわ(B)」，『1977年版おなかのかわ(C)』で瀬田に再話を依頼している。瀬田は，前述したように，松居の絵本制作に多大な影響を与えた人物である。村山・瀬田は，松居が絵本を制作する上で信頼する人物であり，「1958年版おなかのかわ(A)」を含め，三冊の「おなかのかわ」は，松居の絵本観を反映する作品であるとみなすことができる。

（表２）

	「1958年版おなかのかわ(A)」			『1977年版おなかのかわ(C)』	
ページ	文	絵	ページ	文	絵
1	表　紙	心のかてを与える「母の友」絵本32 こどものとも　おなかのかわ　鈴木三重吉訳・村山知義画　下に⑪　緑の帽子をかぶったねこ。ねこのおなかから兵隊が右へ出て来ている。 —絵①’	1	表　紙	おなかのかわ　瀬田貞二（せたていじ）再話　村山知義（むらやまともよし）絵緑の帽子をかぶったねこ。ねこのおなかから兵隊が左へ出て来ている。《こものとも》傑作集⑥ —絵①
			2	見返し	
			3	扉	おなかのかわの題字　瀬田貞二　再話　村山知義　絵　かに２匹，おうさま，おきさきさま，兵隊３人のシルエット　福音館書店
2	あるところに，ねこと　おうむが　おりました。 ふたりは，あるとき　そうだんをして，これからおたがいに，かわるがわる　ごちそうをして，まいにち，よびっこをすることに　きめました。きょうは，ねこが　おうむの　ところへ　よばれていき，あすは，おうむが　ねこに　よばれるというふうに，かわるがわる，よんだり，よばれたり　しようと　いうのです。 それで　まず，だい一ばんに，ねこのほうから　ごちそうを　することに　なりました。	〈一場面〉ねこが画面向かってテーブル左に座り，おうむが右に座り食事をしている。 —絵③’	4（2）	あるところに，ねこと　おうむが　おりました。ふたりは　そうだんして　かわるがわる　ごちそうに　よぼうと　はなしあいました。	〈一場面〉ねこがおうむに電話をしている／おうむがねこに電話をしている —絵②
			5（3）	きょう，ねこが　おうむを　ごちそうに　よんだら，あしたは　おうむが　ねこを　よぶと　いうのです。	
3	ところが，ねこは，ひどい　けちんぼで，おうむが　きても，たった　一ぱいの　ぎゅうにゅうと，さかなの　きれを　たった　一きれしか　ださないで，それを　たべようというのです。 でも　おうむは，ちっとも　ふへいを　いわないで，よろこんで　たべました。おうちへ　かえってから，おなかが　すいて　すいて　たまりませんでした。		6（4）	ところが　ねこは，ひどい　けちんぼでした。それで　ごちそうといったら，ぎゅうにゅう　いっぱい，さかなの　きりみ　ひときれ，びすけっと　いちまいしか　だしません。	〈二場面〉ねこが画面向かってテーブル左に座り，おうむが右に座り食事をしている。 —絵③
			7（5）	おうむは　おとなしいので，　ちっとも　もんくを　いいませんでした。けれども　あんまり　うれしくありませんでした。	
4	そのつぎの　ひは，おうむが　ごちそうを　する　ばんです。おうむは，ねこと　ちがって，いっしょうけんめいに，したくをしました。まず，おいしそうな　やきにくを　二さらこしらえました。それから，おいしい　おいっしい　ちいさな　おかしを，五ひゃくも　やいたうえに，くだものを　一かごとりよせて，おちゃをだす　よういをして，まっていました。まもなく，　ねこが　でてきました。ねこは　ていぶるに	〈二場面〉おうむが画面向かってテーブル左に座り，ねこが右に座り，おうむの用意した御馳走をねこが食べている。バックのいろは水色。 —絵④’	8（6）	つぎに　おうむのばんに　なると，おうむは　すてきな　ごちそうを　こしらえました。 まず　やきにくを　おさらに　ひともり，おちゃを　ひとびん，くだものを　ひとかご　だしました。 それから　くっきーを　こんがり　やいて　５ひゃく　だしました。 そして　じぶんのまえには	〈三場面〉おうむが画面向かってテーブル左に座り，ねこが右に座り，おうむの用意した御馳走をねこが食べている。バックのいろは白。 —絵④
5	つくと，「ほほう，これは　これは」といって，やきにくを，おうむの　ぶんまで，二さらとも，がつがつと　たべてしまい，くだものも　ぺちゃぺちゃと，ひとりで　たべてしまいました。それでも，おうむは　にこにこしながら，五ひゃくもの　おかしのうちから，たった　二つだけ，じぶんのにとって，四ひゃく九十八っつを，みんな，ねこに　やりました。ねこは，それをも，ぺろぺろぺろぺろと，一つものこさず　のみこんでしまいました。		9（7）	ふたつ　とって，のこりの　４ひゃく９じゅう８こを　ねこのまえに　おきました。すると，ねこは　やきにくを　たべつくし，おちゃをのみほしました。そして　じぶんの　４ひゃく９じゅう８こを　すっかり　たべてしまってから，「ぼくは　おなかが　すいているんだ。 ごちそうは　これだけかい」と　いいました。	

6	（本文なし）	〈三場面〉おうむも食べておなかがいっぱいになったねこがおうむの家から階段を下りておもてにでている。 ―絵⑥’	10 （8）	「じゃ　よかったら　ぼくの　ふたつも　おあがりなさい」とおうむがいいました。ねこは　たちまち　それも　たべてしまって，「やっと　もりもり　たべたい　きもちになってきたよ。もっと　たべるものは　ないのかね」といいました。おうむは　だんだん　はらがたってきました。	〈四場面〉からっぽになったお皿が乗ったテーブルの前で座って口に手をあてているねこ。バックのいろは青。 ―絵⑤
7	それから，こうちゃも　がぶがぶと，ひとりで　すっかりのみほしました。それだのに，ねこは，まだ　たべたりない　かおをして，「おいおい，おうむさん，もう　ごちそうは　これだけかい？」といいました。これには，おうむも　あきれましたが，「では，これでも　おあがり。」といって，じぶんが　たべようとおもった　おかしを，二つとも　やりました。ねこは，それをまた，ぺろりとまるのみにして，「ああ　ああ，もっと　たべるものは　ないのかな。たった　これだけじゃ，とても　はらが　もてないよ。」と，ふへいをいいました。 おうむは，あんまりなので，とうとう「もう　なんにもないよ。このうえ　たべたければ，わしをでも　たべるんだね。」と，ねこのずうずうしいのを，はずかしめるつもりで，じょうだんに　いいました。すると，ねこは，「じゃあ，ついでに　よばれていこうか。」というなり，ぺろりと，おうむを　まるのみにしました。そして，さも　うまかったように，したなめずりをしながら，でていきました。		11 （9）	「ほんとうに　なんにも　ないんだよ。もっと　たべたいと　いうなら　ぼくでも　たべろよ」といいました。もちろん　おうむは　じょうだんにいったのですが，ねこは　おうむを　じっと　みながら　したなめずりして，いきなり　ぺろり　ごくんと　おうむを　まるのみに　してしまいました。	
8	そとへでると，まどの　したに，おばあさんが　たっておりました。おばあさんは，まどから，ねこのしたことを，すっかり　みていたのでした。「これこれ，ねこさん。おまえは　いくら　くいしんぼうだから　といって，あの　おうむをまで，たべなくても　いいじゃありませんか。ほんとうに　ひどいひとも　いたものだ。」とあきれたように　いいました。「なんだい？」と，ねこは　あざわらって，「おうむを　くったが　どうしたい。ぐずぐずいうなら，ついでに　おまえも　くってやろうか。ほうら。」ぺろりと，その　おばあさんを　まるごと　のみこんでしまいました。	〈四場面〉おばあさんが左手に立ち，誰かに向かって問いただしている。 ―絵⑥”	12 （10）	それから　ねこは，おもてへ　でました。すると，おうむの　うちの　そばに　おばあさんが　たっていました。おばあさんは　まどから　ねこが　ともだちの　おうむを　たべてしまったのを　みて　すっかり　たまげて，	〈五場面〉おうむも食べておなかがいっぱいになったねこがおうむの家から階段を下りておもてにでている。おばあさんに問いただされている。 ―絵⑥
9	（本文なし）		13 （11）	「ちょっと　ねこさん，おともだちを　たべてしまうなんて　ひどいんじゃありませんか」といいました。「へん　それが　どうした。おうむぐらい　なんだって　いうんだい。そして　ねこは　おばあさんが，「あっ」ともいわないうちに　ぺろり　ごくんと　まるのみに　してしまいました。	
10	それから，おおてをふって，とおりを　どんどんあるいて　いきますと，ひとりのおとこが，ろばをおってくるのにであいました。	〈五場面〉ねこが（左手から）歩いていると前方から（右手）ろばを引いた男の人に出会う。　―絵⑦’	14 （12）	それから　ねこは，いいきになってあるいていきました。すると　まもなく　ひとりの　おとこが　ろばをおってくるのに　であいました。そのおとこは　ろばをぴしぴしと　たたいて　いそがせて　きましたが，ねこに　あうと，「どいた　どいた　ねこどん。うろうろしてると　このろばに　けとばされるぞ」といいました。	〈六場面〉ねこが（左手から）歩いていると前方から（右手）ろばを引いた男の人に出会う。　―絵⑦

11	「おい，ねこどん。どいたどいた。うろうろしていると　けりとばされるぞ。」と，そのおとこが　いいました。「なんだ？おれを　けりとばす？へっへ，そんなへたなろばなんぞが　こわいものか。おれは　いま，おかしを五ひゃくと，おうむを一わと，おばあさんを　ひとり　くってきたんだぜ。ついでに，おまえたちも　かたずけてやろうか。ほら，みろ。」と，ぺろり，またぺろりと，その　ろばと　うまかたとを，わけもなく　のんでしまいました。		15 (13)	「へん，それが　どうした。ろばなんぞ　こわいもんか。ぼくは　いま，くっきーを５ひゃくと　ともだちのおうむと　おばあさんを　ひとり　くってきたところだ。おまえさんたちも　にげようたって　そうはいかないぞ，ほら」ねこは　こういってぺろり　ごくんと　うまかたと　ろばをのみこんでしまいました。	
12	ねこは　とくいになって，また　どんどん　あるいていきました。一ばん　まっさきに，おうさまが，たったこないだ　おもらいになったばかりの　おうひさまと　ならんで，ぴかぴかと　いらっしゃいました。あとには，なんじゅうにんという　へいたいと，にとうずつ　ならんだ，なんじゅっとうという　ぞうが，ずらりと　れつを　つくって　つづいていました。 おうさまは，ねこにけがをさせては　かわいそうだとおお	〈六場面〉王さまとおきさきさまが先頭に立って兵隊，ぞうがならんで左に進行している。ねこ（右手下）。 —絵⑧’	16 (14)	それから　ねこは，ますます　おおでを　ふって　あるいて　いきますと，しばらくして　ぎょうれつが　やってくるのに　でありました。おうさまが　おきさきさまと　せんとうに　たって，そのうしろから　へいたいたちが　らったったと　ならんできました。	〈七場面〉王さまとおうひさまが先頭に立って兵隊，ぞうがならんで進んできている。ねこ（右手）がその行列に出会う。 —絵⑧
13	もいになって，「これこれ，ねこよ，わきへ　よっておれ。あぶないよ，ぞうが　くるから，あぶないよ。」といって，てをおふりになりました。すると，ねこは　かたをいからせて，「へって，おうさま。わたしは　いま，おかしを　五ひゃくと，　おうむと，おばあさんと，ろばと，うまかたを　ひとり　たべてきたんですよ。ついでに　あなたがたも　たべてあげましょうか。ほら，ぺろり　あなたも　ぺろり。」と，たちまち，おうさまと　おうひさまとを　まるのみしました。それから，なんじゅうにんという　へいたいを，すっかりのんでしまい，なんじゅっとうという　ぞうをも，のこらず　まるのみにしてしまいました。		17 (15)	そのうしろに　たくさんの　ぞうたちが　にとうずつ　ならんで，のっし　のっし　とすすんできました。 おうさまは「これこれ　ねこよ。わきへよれ，さがっておれ，わしのぞうたちが　くると　あぶないぞ」といっててをふりました。	
14	ねこは，すっかり　おなかが　ふくれたので，	〈七場面〉ねこのおなかのなか(バックは黒)。ぞう，おうさま，おきさきさま，かにが描かれている。 —絵⑨’	18 (16)	「へん，ぞうが　あぶないだと」ねこは　おなかを　ゆすりながら　いいました。「はっはっは，ぼくは　いま　くっきーを　５ひゃくと，ともだちのおうむと，おばあさんと　うまかたと　ろばをくってきた。きのどくながら　みなさん　そろっていただきますよ。ほら」ぺろり　ごくん　ぺろり　ごくん　ぺろぺろ　ごくごく……。おうさまも　おきさきさまも　へいたいたちも　たくさんの　ぞうたちまでも，ねこは　のこらず　まるのみに　してしまいました。そして　すっかり　おなかがふくれたので，ゆっくり　あるいていきました。	〈八場面〉ねこのおなかのなか(バックは黒)。ぞう，ろば，おうさま，おうひさま，クッキーなどが描かれている。 —絵⑨
15	ゆっくりと　あるいていきますと，こんどは，かにが　二ひき　もがもがと，つちぼこりの　なかを　はいながら　やってきました。「おい，どけ　どけ。」と，かには　ねこをみるなり，いいました。「なんだ？どけだ？　おれは　いま，おかしを五ひゃくと　おうむと，ろばと　うまかたと，それから　おうさまとおうひさまと，へいたいをなんじゅうにん，ぞうを　なんじゅっとうと		19 (17)	（本文なし）	

	くってきたところだ。おまえなぞがにんげんなみに，どけ　どけが　きいて　あきれらあ。ばかめ。ぺろり。」と，たちまち　二ひきとものみこんでしまいました。二ひきのかには，ねこの　おなかへ　すべりこんで，びっくりしながら，あたりを　みまわしましたが，まっくらでなにも　みえませんでした。 しかし，くらがりに　なれてきますと，むこうの　すみに，おうさまが，はんぶん　きをうしなったおうひをりょうてに　かかえて，しょんぼりと　すわって　いらっしゃるのがみえました。				
16	そのばんには，なんじゅうにんという　へいたいが　うずくまっており，うしろには，なんじゅっとうというぞうが，あつまっております。ぞうは，二とうずつならんで　れつをつくろうとして，おもうままにならないので，こまりきっているようでした。そのむかいの　すみを　みますと，そこには，ひとりの　おばあさんが　こごまって　おりました。そのそばには，ひとりの　おとことろばが，ぽつんと　たっております。 もう一つの　すみっこを　みますと，そこの　ところには，ちいさな　おかしが，どっさりつみあげられてろい，そのうえに　一わの　おうむが，はねを	〈八場面〉 1ぴきのかにがはさみでおなか（黒いバック）を切っている様子。おうむは両羽にクッキーをそれぞれ持っている。ろばの顔。 ―絵⑪'・⑫'	20	（本文なし）	〈九場面〉おなかのおおおきいねこがどろのなかをはっている2ひきのかにに出会う。 ―絵⑩
			21 (19)	すると，にひきの　かにが　どろのなかを　はっているのに　あいました。かには　かなきりごえを　あげて「ねこさん　おねがいだ。どいてくださいな」とたのみました。「はっはっは，どけだと。ぼくは　いま　くっきーを5ひゃくまいと，ともだちの　おうむと，おばあさんと　うまかたと　ろばと，おうさまと　おきさきさまと　たくさんの　へいたいたちと　もっと　たくさんのぞうたちを　ぺろりと　くってきたところだ。ほら」ぺろり　ごくん，ねこは　たちまち　かにたちを　のみこんで　しまいました。	
			22 (20)	にひきの　かにたちは，ねこの　おなかへ　おちてから，あたりをみまわしました。まっくらな　なかで　だんだんに　いろいろな　ものが　みえてきました。あちらの　すみには，おうさまが　きを　うしなったおきさきさまを　りょうてに　かかえて　しょんぼりしていました。そのそばには　へいたいたちが　かさなりあって　たおれていました。	〈十場面〉黒いバックにおうさま，おうひさま，へいたい，ぞう，おうむ，クッキー，おばあさん，かにが描かれている。 ―絵⑪
			23 (21)	ぞうたちも　ごちゃ　ごちゃに　かさなりあっていました。こちらの　すみには　おばあさんが　すわっていて，そのそばに　うまかたと　ろばがたっていました。そのまたちかくに　くっきーが　ひとやま　あって，そのうえに　おうむが　はねをすぼめて　うなだれていました。	
17	すぼめて　とまっておりました。「おい，はやく　あなを　あけようよ。」とひとりの　かにに　いいました。「さあ，あけよう，あけよう。」と，ふたりは，さっそく，するどいつめを　ふりかざして，がりがり		24 (22)	「それじゃ　うでを　ふるおうか」と　にひきの　かにがいいました。そして　とがった　はさみで　おなかに　じょき　じょき　ちいさな　あなを　あけました。 じょき　じょき　じょき……あなが　だんだ	〈十一場面〉2ひきのかにのはさみでねこのおなかを切り開けている。 ―絵⑫

	がりがりと，ねこの　おなかの　かわを　ひっかきはじめました。まもなく，ふたりが，でられるほどのあなが　あきました。「もっともっと。―ほかの　ひとも，だしてやらなきゃ　かわいそうだ。」とふたりは，なお，がりがり　がりがりひっかいて，とうとう　おおきなあなを　あけました。			ん　おおきくなりました。そしてごそごそごそ　かには　おもてへはいだしました。	
18	かには，「もう　よかろう。」といって，だい一ばんに，ふたりで　ごぞごぞ　はいでました。すると，おうさまが	〈九場面〉上部にシルエットでかにが二匹，おうさま，おうひさま，へいたいが四人描かれている。（最後の一人は半分だけの姿）。うまかた，ろばが描かれ，おなかのかわからでてきたおばあさん，おうむがおなかからまさにでようとしているところが描かれる。―絵⑬’	25 (23)	（本文なし）	
19	そのあとから，おうひの　てをひいて，すとんと　おとびになりました。つづいて，なんじゅうにんという　へいたいがとんとん　とんとん　とびだしました。なんじゅっとうという　ぞうは，二ひきずつ　ならんで　ずしん　ずしん　ずしんすじんと　でてきました。それから，うまかたが　とびだし，ろばがとびだし，おばあさんが　はいだしました。　そして　いちばんあとから　おうむがおかしを　ひとつずつ　りょうてににぎって　とんで　でました。　おうむは　はじめから，二つだけでがまんするつもりで　いたからです。ばかな　ねこは，そのあとで，おなかの　かわを　ぬうのに，　とうとう　よどおし　かかった　ということです。		26 (24)	すると　そのあとから，おうさまがおきさきさまを　だいたまま　とびおりました。へいたいたちは　らったったと　そろって　とびだしました。ぞうたちはにとうずつ　ならんで　のっし　のっしと　おりてきました。うまかたは　ろばを　ぴしぴし　たたきながら　とびだしました。おばあさんは　ねこに　こごとをいいながら　とびおりました。	〈十二場面〉ろばをひいたおとこ，おばあさん，おうむがでてきている。かに，おうさま，おうひさま，へいたいは，上部にシルエットで描かれている。　―絵⑬
			27 (25)	（本文なし）	
			28 (26)	そして，いちばん　あとから　おうむが　くっきーを　ひとつずつ　つかんだまま　とんで　でました。だって　おうむは　はじめから　くっきーが　ふたつあれば　じゅうぶんだったのですからね。	〈十三場面〉左手にクッキーを２つもったおうむ。みぎてにおなかのかわを糸と針でぬっているねこ。―絵⑭
			29 (27)	ところで　ばかな　ねこは，そのあとで　おなかの　かわを　ぬうのによる　ひる　いちにち　かかったということです。	
			29 (28)	後ろ見返し　奥付	かに２匹，おうさま，おうひさま，兵隊３人のシルエット　奥付
			30	後ろ見返し	白　地
20	裏表紙　　父親の愛情　奥付	兵隊が歩いている。表紙と続いている。―絵⑮’	31	裏表紙	兵隊が歩いている。表紙と続いている。―絵⑮

※（　）の数字は，表記通りのページの数

普及版「こどものとも」は，傑作集『こどものとも』と見返し，扉，後ろ見返しがないこと以外は，文，絵共に同じなので，省略する。

―絵○の表示は，絵の番号を記し，「C」の絵を基準として，番号を付けている。’（ダッシュ）がついている番号は同じ場面を表す絵で似ているもの。